

# 私立大学研究ブランディング事業

## 平成29年度の進捗状況

学校法人番号	331008	学校法人名	順正学園		
大学名	吉備国際大学				
事業名	エコ農業ブランディングによる発展的地域創成モデルの形成				
申請タイプ	タイプA	支援期間	5年	収容定員	2,520名
参画組織	地域創成農学部、アニメーション文化学部、地域創成農学研究科、植物クリニックセンター				
事業概要	吉備国際大学は「地域創成に実践的に役立つ人材を養成する大学」として、地域創成農学部で六次産業化を総合的に研究・教育することを謳っている。この知見と実績を生かし、地方農村社会を対象に、高付加価値・低資源投入型農(漁)業や里山管理、農業ブランドの創出による「エコ農業ブランディングによる発展的地域創成モデル」を形成する。本事業の成果がモデルとなって、広く全国の農村社会の再生・創成に発展的に貢献することが期待される。				
①事業目的	<p>①これまでの経緯と事業の目的</p> <p>本学は、地元の強い要望を受け、平成2年の開学以来、現在までに、岡山県高梁市(本部・高梁キャンパス)に4学部、岡山市(岡山キャンパス)に1学部、および兵庫県南あわじ市(志知キャンパス)に「地域創成農学部」が設置されている。これらの立地拠点の中でも、特に、高梁市および南あわじ市では、人口減少による過疎高齢化が顕著に進行し、経済の停滞、産業の担い手不足、といった、地方都市・地方農村社会に共通する課題を抱えている。本学では、これらの課題に対し、各専門分野の特徴を活かしたさまざまな取り組みを行ってきた。平成25年には、COC事業「だれもが役割のある活いきした地域の創成」が採択され、両市のキャンパスで、地域創成に向けた多面的な取り組みを行った。地域創成農学部は、「地方農村社会の再生・創成」を目的として開設された学部であり、COC事業では、南あわじ市を対象とした、将来人口の予測、固有作物栽培の現状分析と商品化、獣害調査とジビエ食品の試作などの研究成果をあげた。本事業では、これまでの研究実績を集約し、さらに発展させるために、地域創成農学部を中核とし、南あわじ市において「エコ農業ブランディングによる発展的地域創成モデルの形成」を目指す。事業を通じて、地域を再生するための教育・研究を実践するとともに、学生と地域との協働で「大学エコ村」創りを試みる。この事業に関わることで、全国からの入学生が、出身地を含む各地で農村社会の再生・創成に発展的に貢献できる実践力を身につけることが期待される。</p> <p>②大学の将来ビジョン</p> <p>本学は「学生一人ひとりのもつ能力を最大限に引き出し引き伸ばし、社会に有為な人材を養成する」ことを建学の理念としている。本学の将来ビジョンを、「地域創成に実践的に役立つ人材を養成する大学」と設定し、事業を通じて、地方都市の課題に関わるこれまでの取り組みをさらに発展させ、建学の理念を具現化する。</p>				
②平成29年度の実施目標及び実施計画	<p>(実施目標)</p> <p>【研究活動】</p> <p>外部研究協力者との調整や研究体制の構築を行った後、研究に着手する⇒研究計画の妥当性、目標の達成度、マネジメント体制などについて自己評価と外部評価を実施する。</p> <p>【ブランディング戦略】</p> <p>大学の将来ビジョンおよび取組事業内容を学内外に周知し、大学の認知度とイメージを向上させるために、ブランドマーク・ロゴ等によるブランディングのトータルデザインを構築する⇒HP・ブログアクセス数に基づいて自己評価・外部評価を行う。</p> <p>(実施計画)</p> <p>【研究活動】</p> <p>①農業人口の動態・農業経営状況の調査⇒調査法の決定 ②アミノ酸・ビタミン・糖・有機酸の混合液(バイオスティミュラント、以下BS)の作物の生長に及ぼす効果の解析(圃場)、BS処理前の溜池の水質検査⇒BS処理の効果の確認 ③南あわじ地域における作物病害の実態調査⇒シンポジウム・HPを通じての成果発信 ④上記BSをクルマエビ水槽に投入⇒BSがクルマエビの成長(生体重や脱皮回数)に及ぼす効果の評価 ⑤二次林の分布と所有・管理形態から、調査対象地を選定⇒二次林の分布地図作成 ⑥獣害忌避植物の選定(ヒカマ・エゴマなどから)と栽培⇒栽培法の確立 ⑦タマネギ外皮の収集と洗浄、残留農薬除去と成分の確認⇒残留農薬が基準値以下、ケルセチン5%以上含有の確認 ⑧キノコ栽培廃菌床による抗菌活性の検定と調達⇒病原菌に対する抗菌活性の検証と有効成分の抽出 ⑨間伐竹材を用いた有機肥料の作成⇒植繊機を導入し、間伐竹材をパウダー化して堆肥作りに着手 ⑩害獣捕獲猟友会の組織化、血抜と獣肉熟成技術習得、独創カレーの試作⇒年間約30頭の獣を捕獲 ⑪ナルトオレンジ苗木生産システムの確立⇒苗木(100本)の生産 ⑫地域特産品(スイセンやピワなど)由来の天然酵母菌の探索⇒安全性の高い酵母菌の採集・分離</p> <p>【ブランディング戦略】</p> <p>HP特設サイトを開設する。アニメーション文化学部とのコラボレーションにより、初期の段階で、本事業のブランドマーク・ロゴ・イメージキャラクターをデザインの構築を開始する。⇒目標達成度を自己・外部評価する。</p>				

<p>③平成29年度の事業成果</p>	<p>本事業の目的達成のため、12の研究課題を設定した。事業開始が、年度後半であったが、すべての課題において研究は計画通り着実に進捗した。主要な成果は、本研究で供試したバイオスティミュラントの有機物分解能が極めて大きいこと、南あわじ市の民有林を旧町村単位で分類し、分析対象を、生業に特色のある2地区に絞り込むとともに、明治以降の、淡路島南部における林野の利用管理に関する概要を整理したこと、タマネギ外皮のケルセチン含有量と農業残留量を測定し、安全な化粧品を製造するためのタマネギ特産地を決定したこと、キノコ廃菌床の加水分解抽出溶液を作成し、抽出液の中に抗菌活性や抵抗性を誘導する有効な成分が含まれることを実証したこと、などがあげられる。これらの成果は、農業を主産業とする地域の創生に何らかの指針を提供するものであると確信している。次年度以降、社会実装に向けて研究のさらなる深化を図っていきたいと考えている。</p>
<p>④平成29年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>(自己点検・評価) 5段階評価(秀・優・良・可・不可)5点満点で平均値は事業全体の評価が4、ブランディング戦略の評価が4、研究内容の評価は、進捗状況4、研究成果の経済性・普及性・波及性・発展可能性4、研究成果の優秀性4、研究全体評価4であった。選定通知を受け、直ちに全学的に本事業のブランディング活動および研究活動の推進体制を確認した。ブランディング活動では、HP特設サイトを開設し、広報用パンフレット、事業及びブランド品用のロゴマークの作成を行い、学生アンケートにより本学志望に関わった情報媒体について調査し、ブランディング活動の基礎を整備した。研究活動では、事業の開始が年度後半であったために、研究遂行に必要な物品の購入に時間を要した課題もあったが、この課題を含めて研究は着実にスタートし、目標を達成できた。研究活動はその緒についたばかりであり、得られた成果の経済性・普及性・波及性、発展可能性について評価することは難しいが、農村社会における課題解決を目的としており、目標通りの成果が得られれば、それらの成果は日本の農村社会に波及し、地域の発展・再生に寄与する可能性が高い。なお、一部の課題で、エコ農業の実現や新たな基礎研究分野を創出する可能性のある成果が得られている。</p> <p>(外部評価) 5段階評価(秀・優・良・可・不可)5点満点で平均値は事業全体の評価が4、ブランディング戦略の評価が4、研究内容の評価は、進捗状況4、研究成果の経済性・普及性・波及性・発展可能性4、研究成果の優秀性4、研究全体評価4であった。代表的なコメントとして以下のような意見が寄せられた。ブランディング活動ではアニメーション文化学部の参画によるCM等の活動も理解できるが、地域連携の風景や、学生の取組を実際の映像に流すなど大学の特色ある取り組みを流すことも必要と思う。研究については事業開始が年度後半であり、研究期間は3か月と短かったが、すべての課題において研究は計画通り着実に進捗し、すでにいくつかの重要知見が得られている。とくに、バイオスティミュラントの‘ルオール’が土壌中の有機物(堆肥)の分解を促し、化学肥料の投入量を低減できる可能性を示す結果を得たことは、エコ農業の実践に資する成果として高く評価する。取り組まれている研究は、農業を主産業とする地域社会の創生に関わる研究を多様な角度から取り上げており、その成果の経済性、普及・波及性はおのずと高い。したがって、評点を「高い」とした。なお、成果の普及(社会実装)にあたっては、行政や農業者などの理解と支援が必要である。理解を得るための工夫・戦略を考えていくべきであろう。</p>
<p>⑤平成29年度の補助金の使用状況</p>	<p>研究:研究機器購入(植織機、マスターサイクラー、エビ飼育用水槽セット、エースホモンナイザー、ウッドチップパー、保冷機) 広報:ブランディングロゴマークの作成、ホームページ作成、リーフレット作成 その他:研究関連消耗品、雑器具購入</p>